

農村部女性の生計強化と持続に向けた支援

ミカモナ・フロレさんは、コンゴ共和国の首都ブラザビルから約22キロメートル離れたプール地方のゴマツェツェ村に暮らす女性です。障害があるために、ミカモナさんは日常生活と家族の介護・育児能力に大きな制約を受け、十分な支援も得られていません。障害があっても、経済面を含め、ほぼ自立した暮らしを送ってはいますが、最近では使っていた三輪の車いすが変形し、日課をこなす役に立たなくなり、生活に苦労しています。

コンゴ共和国



34万2,000平方キロメートルの国土に520万人（2018年時点）が暮らすコンゴ共和国は、人口密度が低く、国民の過半数がブラザビルとポワントノワールという2大都市に集中しています。それ以外の地域は、アフリカでも最も人口密度が低い地域の一つであり、1平方キロメートル当たりの人口は12.8人にすぎません。南部のコンゴ川沿いの首都ブラザビルは、コンゴ民主共和国の首都キンシャサのすぐ対岸にあり、この2つは世界で最も近接する首都となっています。

国土のほとんどが熱帯林に覆われたコンゴ共和国は、総面積の約3分の1を占める広大な未使用の耕地も抱えています。また、アフリカでは10本の指に入る産油国でもあり、大量の鉱物資源にも恵まれています。

人間開発指数の順位は低く、2017年にはプール地区の紛争で国内避難民が発生し、人道上のニーズが一気に高まりました。また、COVID-19とその対策の影響で、食料価格の上昇と所得の損失が起き、これが都市部の最弱者層世帯にさらに大きな打撃を与えています。

生活条件を改善し、社会的な緊張と若者による暴力を減らすため、UNDPと日本は、若者と女性に支援を提供することで、その経済と社会への復帰と再統合の可能性を高めようとしています。

「政府と日本による支援に深く感謝しています。10人の子どもを育てているので、大変助かります」 - ミカモナさん



2020年10月15日、ゴマツェツェ村で、国連常駐調整官、保健・人口・女性・開発への女性の統合担当大臣と面会するミカモナさん

女性はただでさえ、たくさんの課題に直面することが多く、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の世界的大流行（パンデミック）でも特に大きな社会経済的影響を受けています。ミカモナさんに対する支援は「プール地方とその周辺の紛争被災コミュニティにおける社会経済的復興、対話および若者の教育を通じた平和の定着強化」プロジェクトにより、可能になりました。これは日本が国連開発計画（UNDP）を通じて2019年の補正予算で支援しているプロジェクトです。

ミカモナさんのほか、女性メンバーが大半を占める40の協同組合（計240人程度）が、COVID-19のパンデミックで悪影響を受けた所得創出活動を再開できるよう、さまざまな農業用機材と資材の支給を受けました。

また、今後数週間で、こうした活動を持続させるための訓練も受ける予定です。この支援は、保健・人口・女性・開発への女性の統合省とのパートナーシップにより提供されているもので、2020年10月15日にはその引渡式が行われました。

日本とUNDPは、プール地方のほか、ブラザビルとブエンザをはじめとする周辺地域における経済と社会の復興、社会復帰および生活環境の改善を支援するという目標を掲げています。このプロジェクトは、この目標を達成する一環として行われています。国連平和構築基金の資金供与による共同プロジェクト「プール地方における平和の定着と武装解除・動員解除・社会復帰プロセスの開始」によって達成された成果の定着も目指すこのプロジェクトは、社会的最弱者層をはじめとする人々の復興を支援し、コンゴ政府と密接な連携を図っているUNDPのコミットメントも実証しました。



2020年10月15日、ゴマツェツェ村で、寄贈物の一部を披露する国連常駐調整官、UNDP常駐代表および保健・人口・女性・開発への女性の統合担当大臣



ゴマツェツェ村に設けられたスピーカー・スタンド

住民の自立した生活を確保するとともに、持続可能な開発目標（SDGs）、特に飢餓の根絶に関する目標2とジェンダー平等に関する目標5への貢献も目指す大がかりな取り組みです。引き渡し式は受益者が政府と日本をはじめとする技術・資金援助パートナーに謝意を表明するなど、友好的な雰囲気の中で閉幕しました。